

記録

35ミリ

カラー／28分

日・英・伊・独・イン
ドネシア語版

■企画

東京国立博物館

スタッフ

■製作・脚本・演出

村山英治

■撮影

中村誠二

■助監督

川田一郎

■照明

鹿島俊男

■音楽

長沢勝俊

■編集

長谷川宣人

■解説

内藤武敏

文部省特選 1974年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第7位

平安時代には中国文化一辺倒から、わが国独自の文化が育ってくる。漢字から仮名を作り出し『源氏物語』のような文学を生み、身の生活や季節の移り変わりを繊細な筆遣いで描いた大和絵も誕生した。この文学と絵画を統合したものが絵巻で、左手で開き右手で巻きながら見ていく。この映画に収録されている8巻の絵巻はすべて国宝で、今日それを揃えてみる機会はまず得られない。当時の人々がその生活と事件を画面に託した絵巻から、私たちは歴史の大きな流れとそれを動かした民衆の力と願望を読み取ることができる。



今に残る最も古い絵巻は、平安後期から末期にかけてのもので「源氏物語絵巻」「鳥獣戯画」「伴大納言絵詞」「信貴山縁起絵巻」と数は少ないが、いずれも傑作で四大絵巻とされている。「源氏物語絵巻」は、吹抜屋台と呼ばれる室内を鳥瞰した構図で平安貴族の耽美的な生活を描き出している。「鳥獣戯画」は、「源氏」とは対照的に動的でユーモアに満ち、民衆の高らかな笑いが聞こえてくるようである。「伴大納言絵詞」は、急を聞いて朱雀大路を馳せいく検非違使の一行から始まる。応天門が放火によって炎上したのである。この絵巻は平安朝の初めに起きた貴族の争いを題材にしたもので、場面の推移展開のうまさは、ほぼ同時代の「信貴山縁起絵巻」も同じだ。この絵巻には信貴山の聖（ひじり）、命蓮の姉が郷里の信濃の国からはるばる弟を訪ねる旅路も描かれ、そこには地方の自然や庶民の生活や人情の細やかさも描かれ、人間の生きざまが感じられる。

絵巻はさらに「餓鬼草紙」「地獄草紙」「平治物語絵巻」「一遍上人絵伝」と続く。これらの絵巻は、貴族社会の崩壊と封建時代の始まる中世初頭の社会を鮮やかに描き出している。平安貴族が作り出した絵巻という形式は、奇しくも己れの没落を大きなドラマとして後世に残したともいえる。